『早すぎる死』

手元に１枚の写真がある。１４歳のＴ君と一緒に病室で撮った写真である。写真を見ると、うんと年上であるはずの私が幼く見え、逆にＴ君がやけに大人びて見える。

今から１６年前、私はＴ君と出会った。彼は悪性リンパ腫に罹り、長期間にわたり化学療法を受けていた。残念ながら彼の悪性リンパ腫はとても悪性度の高いタイプで、予想通り治療も難航しており、なかなか寛解（あたかも治ったような状態）に入らなかった。私は担当医ではなかったが、注射などで彼の部屋を訪れることが多かった。治療により髪の毛が抜け落ちてしまった彼は、銀縁のめがねをかけ、１４歳とは思えないほど落ち着いて見えた。しかし、見かけと違い、話してみると、言いたいこともなかなか言い出せない、純な１４歳であった。

しばらくして、担当医が長期出張することとなり、誰かが担当を代わらねばならないこととなったが、ある情報から、Ｔ君が私に担当医になってもらいたいと言っている、ということを聞き、私は荷が重いと感じながらも、彼のリクエストに応えた。

彼の病気を治癒に導くことは困難であると思われた。それが分かっていただけに、いっそう彼の担当医になることは大きなプレッシャーであった。両親と相談しながら、今まで使用していない薬剤を使いつつ、化学療法を続けたものの、やはり現実は厳しかった。繰り返し行う厳しい治療、そしてその都度襲うさまざまな合併症にも関わらず、彼はいつも涙一つ見せずに、家族やスタッフにもその辛い思いをぶつけることが無かった。その傍らにはいつも母親はもちろん、仕事から帰った父親の姿もあった。

厳格そうな父親はＴ君をいたわるだけではなく、お互い一人の男同士として会話をしているようにみえた。息子の前で悠然と構えている父親の姿を見て、Ｔ君にとっては頼もしく、また不安も解消されていたことだろう。そんなＴ君も、今まで私が出会ったどの大人の患者よりも、悠然としているように見えた。若いが、苦難を乗り越えてきた真の強さがそこに感じられた。

Ｔ君との別れは突然訪れた。ある日、私はたまたま当直をしていたが、夜明けも近いという時間に彼の急変の知らせを受け、慌てて病室へ向かった。病状の悪化とともに脾臓が大きく腫れ上がっていたのだが、突然破裂したのである。Ｔ君はしばらく強い痛みを感じていたものの、まもなく血圧が低下するとともに、意識も薄れ、駆けつけた両親が見守る中、息を引き取った。あまりにも突然の別れに、私は言葉を失い、悲しみにくれる両親の傍で、あふれる涙をこらえ切れなかった。もっと彼の力になりたかった。

この時代、まだ骨髄バンクは正式に設立されず、非血縁者から骨髄移植のドナー（提供者）を探しだすことは事実上できなかった。また私たちの大

学病院ではまだ骨髄移植に取り組んでいなかった。彼に骨髄移植を施すことができたら救うことができたのかもしれない。私は、彼の死を契機に、骨髄移植をやりたい、という思いが湧き上がり、その後準備を進めることとなった。

そして、それから３年後、私は仲間とともに骨髄移植をスタートさせた。投与する薬剤の量、点滴の量、その他の処置にも緻密な計画を必要とし、また治療も厳しく、その後の容態の変化も十人十色で、移植後１年経っても油断できないほどの神経を使う骨髄移植という最先端の治療に私は魅せられ、没頭していくこととなる。そこには今まで化学療法だけでは救えなかった人たち、とりわけ若い人たちの命を一人でも救うことができれば、という思いで一杯であった。

そんな自分が今、命を救う医療だけでは無く、その人を支える医療に没頭している。もちろん、一人でも多くの人を救う、という意味では私の根本にあるものは何も変わりはしない。最近でも有名人の方が白血病に罹ったニュースを耳にした。そんなニュースを聞くと、何となく胸が痛み、昔を思い出す。そして、今現在厳しい治療を受けているであろう彼らに心からエールを送りたい気持ちでいっぱいである。そう、今は治療にも限りない未来があるのだから。あきらめず、頑張って欲しい。

（平成 17 年 2 月 21 日　著）